

若年性認知症・初期認知症のデイサービスの実施ポイント

1日の流れ

来所・送迎

- ・送迎車にて送迎を行う。
- ・途中まで、バスや電車で来る人を駅で待ち合わせして送迎する。
- ・家族が付き添って来所する。
- ・本人一人で通える人は通ってもらう。

本人家族と話し合い、危険も伴うことを理解した上で、本人のできる範囲を考え来所方法を決めていく。

健康状態のチェック

- ・自分でできる人は、健康センターにあるような自動の血圧計で測定する。
- ・体温を測る。
- ・自分でノートに書ける人は記入する。

朝のミーティング

- ・今日の参加者の紹介 点呼、一言
- ・スケジュールを皆で決める 昼食をどうするか 今日することの確認
- ・ラジオ体操、ストレッチ、朗読など声を出す

昼食

- ・弁当や外食の場合は、外出する 支払いの見守り
- ・調理の場合は、買い物、調理
- ・歯磨き、あとかたづけ、昼寝、コーヒーをいれる、飲むなど

活動・作業

- ・朝のスケジュールの確認
- ・今日すると決めたことを実行する
- ・作業、スポーツ、散歩など

振り返り

- ・今日、行ったことを振り返る、感想を述べ合う。掃除。

「できること」を増やしていくための仕組み

1. 記憶や見当識障害などを補う

- ① 1日のスケジュールをみんなで決め確認
- ② 繰り返し確認
- ③ いつでもみることができるように掲示
- ④ ノートに書ける人には書いてもらう
- ⑤ 今から何をするか、その都度確認
- ⑥ 季節感を取り入れる
- ⑦ 振り返り



- ① 1日のスケジュールをみんなで決め確認すること

1日の始まりには、カレンダーを見ての日付の確認、参加者の確認（点呼）、今日のスケジュールの確認を必ず、利用者と共に決めながら確認していった。これは、一人の利用者が、何故他のデイサービスへ行くのが嫌だったのか聞いた時に、「勝手に決められるから」と言われたことによる。本日の昼食を何にするか、今日頼まれている仕事、利用者のやりたいこと等を話し合っで決めた。数日後の行事などについても、利用者と相談しながら計画した。

- ② 繰り返し確認

①のスケジュールを、1日の流れの中で折にふれて確認を行い、次に実施することを確認して実施に移した。

- ③ いつでもみることができるように掲示

いつでも確認したい時に確認できるように掲示しておいた。

- ④ ノートに書ける人には書いてもらう

写せる人は自分のノートに記録してもらった。

- ⑤ 今から何をするか、その都度確認

記憶障害があるので、スケジュールを確認することで、すべきことを明確にした。

- ⑥ 季節感を取り入れる

スケジュールの中には、季節感をできるだけ取り入れていった。そうめん流し、初もうでなど

- ⑦ 振り返り

一日の終わり、帰る前に今日やったことの振り返りをスケジュールに沿って実施し、感想を述べ合うことで、記憶にとどめやすくすることと、良い気分で帰ってもらえるように配慮する。

2. 自分のやりたいこと、 できることをみつける

- ① 本人の声を聴く
- ② 試してみて 「～させられる」「～したくない」
- ③ 表情を見て
- ④ 集中度を見て
- ⑤ 好きだったことを思い出してもらおう
- ⑥ 実行をサポートする



① 本人の声を聴く

本人と話をしていく中で好きなこと、やりたいことを考えてもらう。好きだったことを思い出してもらう

② 試してみる

興味があるのではないかと思うことを試してみる。「～させられる」「～したくない」と否定的な反応であっても、表情や集中度を見て本当に興味があるかどうかを見ていく。

⑤ 好きだったことを思い出してもらおう

利用時に家族に、本人生活歴や好きなことなどを書いてもらうシートを渡し、本人と思い出しながら記入してもらう。

⑥ 実行をサポートする

実行に移るまでの計画を一緒に立てたり、道具や材料をそろえることを手伝う。



道具やしつらえの配慮

自分でできる行動を増やすためには生活習慣の中で、誰もが使い方がわかりやすい道具を置いておくことが重要

3. 自分でできることは、自分で

- ① サポートしすぎない
- ② 本人の行動を止めない
- ③ 血圧を自分で測る
- ④ 言葉でのサポート 「歯磨きしましょうか」
- ⑤ 困ったら手伝う
- ⑥ 行動が導き出されるしつらえ
- ⑦ 監視でなく さりげない見守り
- ⑧ お金を自分で払ってもらう



スタッフは、サポートしすぎないように、本人の行動を見守り、危険を予測しすぎて本人の行動を止めないようにする。席を立つと「どこに行くのですか？」と、心配になって声をかけたりしていたが、声をかけずに何をしたいのか見守るようにアドバイスする。

健康センターにあるような、自動の血圧測定器で血圧を自分で測る。

お弁当などを買いに行き、自分でお金を払ってもらうようにする。

「歯磨きしましょうか」など、初めに言葉で促し、言葉だけでは難しい人には一緒に歯を磨くなどスタッフがモデルになって見てもらうなどして、困ったら手伝うようにする。監視でなく「さりげない見守り」を行う。

また、お茶のセットを置いておくなど、行動が導き出されるしつらえも重要である。利用者が自分でしたいことが、できるように物の置き場所をわかりやすくする。使い方がわかりやすい物を置く。

4. 自分で決めることを多くする

- 選択肢や、今日のやることリストを示してお弁当、外食、作る
- お金を払う いくらのお弁当を買うか
アートワーク
- やり方は示すが、やり方は自由
- 色選び、紙選び・・・
- 良い悪いで評価しない



選択肢や、今日のやることリストを示したりして自分でどれを選ぶか、自分で決める場面を多く持つようにする。昼食は、弁当、外食、作るのか、朝のミーティングで決める。

いくらのお弁当を買うか、いくらのお定食を食べるのか自分で決めてもらい、お金を自分で払ってもらう。

アートワークでは、やり方は示すが、やり方は自由で、色選び、紙選びなど選択する時間を十分に使うてもらえるようにする。作品は、良い悪いで評価しないようにする。

5. 社会の中の一員として、仲間と地域と

- 仲間と体験を共有する
もの忘れについて話す
- 周りとの歩調を合わせる
- 個人行動と、集団行動
- 他の人のお茶を入れてくれる
- ボランティアさんとのふれあい
- 本人がボランティアとして活躍



もの忘れについて話すなど、仲間と体験を共有する話しをする機会を持つ。

散歩や他の活動でも、一人だけ早かったり、他の人と違うことをしたいと希望された時に、周りとの歩調を合わせるように、他の人の様子を見てもらうように促したり、「仲間と一緒にしませんか」と仲間を意識づけてもらうように話す。

個人行動と、集団行動を組み合わせて、個人でいたいこともできるようにする。

お茶を自分で入れていたら、他の人のお茶も入れてもらうようお願いする。

ボランティアさんとのふれあいの時間も持つようにする。また、本人がボランティアとして活躍できることも実施する。

6. 疾患の特徴に配慮した対応

ADの特徴を知って

- 記憶障害による不安に対応
- 道に迷わないように
- 置き場所を忘れないように

FTDの特徴を知って

- 脱抑制的な行動 信頼関係に基づく約束
- 時刻表的な行動 周りとの協調できる習慣作り
- オーバーアクション 親しみや存在感を示す行動
- 言葉の障害を補う 文字や物を見せる



アルツハイマー型認知症の人には、記憶障害による不安がおこりやすいので、記憶をサポートする援助が重要。他の利用者とのなじみの関係を作れるように、利用者同士の交流を促す。

道に迷わないように、また置き場所を忘れないように配慮する。

前頭側頭型認知症の人には、脱抑制的な行動の中で生活に支障をきたすような行動があれば、信頼関係に基づく約束をする。利用者にも約束を守ってもらうが、スタッフも必ず守る。

時刻表的な行動は、周りと協調できる習慣作りを行えるようにする。

オーバーアクションは、親しみや存在感を示す行動であると考えて、握手や本人の目を見てあいさつする。

言葉の障害がある場合は、文字や実物を見せてコミュニケーションに工夫する。

7. 家族の力もだしてもらおう

- 本人の昔のことを教えてもらう
- 一緒に通ってもらう人も
- 手伝ってもらうことも
- 家族に一步を出してもらう安心感
- 家族が学べる場 「あんしん塾」



家族から本人の昔のことを教えてもらう。場合によっては、一緒に通ってもらい、一緒に活動してもらおう。ご家族にも手伝ってもらうこともお願いする。認知症に対する悩みやデイサービスでの対応を一緒に解決できるように相談する。家族が学べる場 「あんしん塾」も同時に行う。

2014年3月31日

若年性認知症・初期認知症の専用サービスの開発事業【簡易版報告書】

平成25年度独立行政法人福祉医療機構福祉活動支援事業助成金報告書

作成：特定非営利活動法人認知症の人とみんなのサポートセンター

住所：大阪市東成区東小橋1-18-33

TEL:06-6972-6490 FAX:06-6972-6492

E-mail dementia.spc@kxe.biglobe.ne.jp